

ホームステイ・ガイドブック (ホストファミリー用)

A Homestay Guidebook (for Host Families)

南 満 幸

本学は、過去3回にわたって、姉妹提携を結んでいるイースタン・メノナイト大学（米国バージニア州ハリソンバーグ市にある4年制の私立大学。略称EMU）が隔年開催するJapan Study Tourの「稚内セクション」のホストを務めてきた。EMU一行は、札幌・東京など日本の他の都市も訪れるものの、Japan Study Tourのハイライトはあくまでホームステイをメインとした稚内セクションだということであるので、本学としても、このホームステイを可能な限り充実した、また思い出に残るものにするべく、その時々で最大限の努力を払ってきた。

言うまでもなく、ホームステイが成功するかどうかは、何よりもホストファミリーとゲストの間に良い関係が築かれるかどうかにかかっている。多少の不安は抱きながらも、遙か日本での異文化体験を楽しみにやって来るゲスト。同じく多少の不安はあるものの遠い異国からの訪問客の到着を心待ちにしているホスト。この両者の橋渡し役を務める私たちとしては、良き出会いの場を設定してやることさえできれば、ホームステイの成功はもう約束されたも同然である。そのためには、両者が抱いている不安を、完全に払拭することまではできないにしても、かなりの程度軽減してやることが不可欠である。

本稿は、過去の経験をもとに、ホームステイの当事者——ホストとゲスト——のうちホストを対象として書かれたものである。即ち、日本人家庭が英語圏からのゲストを迎え入れる際に必要な予備知識・心構えなど説明した、「ホストファミリー入門」とも言うべき内容になっていて、本紀要に掲載されているEdward P. Bandlow教授の「ホームステイ・ガイドブック〈ゲスト用〉」と対をなすものである。

また、私自身、本学からEMUへのStudy Tourの引率者として、過去5回ホームステイのゲストの立場になったことがあり、その時の経験が本稿を書くに当たって少なからず役立ったことを付記しておく。

1. はじめに

外国からの訪問客をホームステイさせるというのはやりがいのあることです。数多くの文化的違いに遭遇して、時には驚かれることもあるでしょう。ホームステイを成功させる秘訣は、柔軟かつ寛容な精神を持つことです。文化的違いに遭遇した時、驚いたり興味を持ったりなさるのは構いませんが、感情を害したりはなさらないで下さい、ということです。これは、あなたのご家族、ゲストの双方にとって、学ぶところの多い経験となりましょう。この機会を最大限に利用して「楽しんで」下さい。外国からの友人をご家族の一員として扱うようにして下さい。「ホスト」に対する語として便宜上「ゲスト」という呼び方はしますけれども、所謂「お客様」扱いはしないで下さい。特別なおもてなしは必要ありません。皆さんが「メイド」や「召使」になってはいけません。ゲストの方がお宅の日常生活に合わせるように努力するべきなのです。ゲストは、日本の普通の日常生活を知るために、はるばるこの稚内までやって来るのですから。

ゲストには、日本人家庭での生活のしかたを一通り説明したガイドブックを渡してあります。次に書いてあることは、基本的にそのガイドブックの内容と対応するものです。

2. ホストファミリー心得

皆さんはホームステイについて心配なさっているかも知れませんが、それはゲストの方もたぶん同じでしょう。ホストファミリーになるのは今回が初めてかも知れませんが、ゲストの方もホームステイするのはたぶん初めてでしょう。

たぶん言葉のことを心配なさっているでしょうが、それはゲストの方も同じことです。まず間違いなく言えることは、ゲストの日本語より皆さんの英語の方が上だ、ということです。とは申しましても、言葉は問題の一つではありましょう。そこで、ご希望があれば、本学の英会話が達者な学生をアシスタントとしてお宅に派遣いたします。皆さんが必要と思われるどんなことにでも学生をお使い下さい。ただ、学生も勉強したり睡眠を取ったりする時間が必要であることはお忘れなく。

アシスタントの学生は、ゲストが最初にお宅に到着するときに特に役に立つことでしょう。お宅の生活様式、家での決まりを説明なさるときに、通訳としてお手伝いするように言ってあります。また、質問をしたり、質問に答えたり、そして勿論、お互いのことをもっとよく知るために皆さんがゲストと会話なさるときにも、アシスタントをお役立て下さい。

「ウチは狭すぎるのでは」とか「粗末な家だからお客様をお迎えするのは気が引ける」

などというご心配は無用です。皆さんは日本の家に住んでおられるのです。そして、まさしくそこにゲストは泊まりたいと思って、はるばる日本までやって来るのですから。皆さんの家はゲストの家とは違うでしょう。でも、だからこそ、そこに泊まるのが楽しくもあり、面白くもあるのです。

ゲストと初対面の挨拶を交わされた後で、皆さんがまずなされることは、家庭内の決まりを説明することだと思います。それから、お宅の設備の使い方の説明に移る、といったところでしょうか。

複雑な説明をなされる際など、ゲストにちゃんと意図が伝わったかどうか不安だが、アシスタントの学生の英語力では手に負えないと判断なさった場合は、いつでも教員の誰かにお電話下さい。(教員の電話番号表をお渡ししておきます。)

私たちの経験上、「日本スタディーツアー」参加者に「一番楽しかったのは？」と聞くと、決まって「稚内でホストファミリーと一緒に過ごした時間」という答えが返って来ます。自由時間がありましたら、その一部で結構ですからゲストのために割いてあげて下さい。言葉の問題は確かにありますが、会話をあまり必要としない活動を皆さんの通常の日課に織り混ぜる、というのも一つの手です。そうすれば、英語のことで頭を悩まさなければいけないというプレッシャーもいくらか軽減されましょう。ゲストのために時間を割いてあげて下さい、と申し上げましたが、別に贅沢なもてなしは必要ありません。普段の通りになさって下さい。

海外旅行及び異文化間のコミュニケーションは、楽しい反面、非常に疲れる経験でもあります。ゲストが十分な休養時間を取れるようにご配慮下さい。恥ずかしながら、私たちも、「ここに連れて行ってあげたい、あそこも見物させてあげたい」とスタディーツアー参加者をあちこち引きずり回したせいで、何名かが疲労のために体調を崩してしまった、という苦い経験がありますので。この失敗、及び5度にわたってゲストの立場になった経験から、「こんなにフリーな時間が多くていいのだろうか？」と思う程度のゆるめのスケジュールの方が、実はゲストにとっては有り難いのだ、という教訓を得ました。

一般に、アメリカ人は日本人よりも「言葉によるコミュニケーション」に対する依存度が高いと言われています。「以心伝心」という言葉に象徴されるように、日本ではむしろ、「言葉に頼らないコミュニケーション」が重んじられるようですが、アメリカでは事情が大分違います。ただ、このホームステイでは、アメリカ人と同じくらいおしゃべりになる必要はありません。ゲストには、なるべく日本人の会話のペースに合わせるように言って

ありますから。

万が一何か問題が起きたら、ご遠慮なく私たちスタッフにご相談下さい。

3. 異文化間コミュニケーション

異文化は自国の文化を映す「鏡」である、としばしば言われます。私たちは普通、鏡に映さなければ「自分の顔」を見ることができません。それとちょうど同じように、異なる文化に接したとき初めて自国の文化が見えてくる、という意味でなかなかまい表現だと思えます。

日本国内ならば「当たり前」の事が、(例えば) アジア全体を見渡した場合、全然「当たり前」ではなくなるのです。更に全世界に視野を広げれば尚更です。

例えば、日本で見られる「手招き」のジェスチャーを考えてみましょう。手のひらを下に向けて手を前に伸ばして指を前後に振るあれです。この何の変哲もなさそうな「手招き」の動作が、(例えば) アメリカ人がやる「シッシッ、あっちへ行け」という意味の人や動物を追い払う動作に酷似しているのです。これは、同じジェスチャーが日米で正反対の意味に受け取られる極端なケースですが、文化的背景が異なればジェスチャーの意味も異なる、という例は決して珍しくはありません。

日本人が得意とする所謂「本音」と「建前」の使い分けも、アメリカ人にとっては非常に分かりにくいもの一つです。例えば日本人同士ならば、社交辞令のつもりで「今度是非遊びにいらして下さい」と言って、相手も「ええ、そのうちきっと寄らせて頂きます」と答えたくせに、実際は何年間も「訪問」は実現されない、というのそのままあることですが、うっかりアメリカ人に日本人相手の時と同じ軽い気持ちで「今度是非遊びにいらして下さい」などと言おうものなら、多分「私、次の日曜日空いているんですが、ご都合はよろしいですか?」とか「何時に行ったらいいですか?」とか「ご近所に目印になるような建物はありますか?」と矢継ぎ早に質問が飛んで来てたじたじとなることでしょう。私の経験から申しますと、アメリカ人は(「原則として」という但し書きはつきませんが)本気で思っていることしか口にしないのです。

このような「違い」に遭遇した時、私たちは「驚き」(「ショック」と呼んでもいいほど強いこともあります)を感じますが、それを快いものと感じるか、はたまた不快なものと感じるかは、ひとえに私たちの心構えにかかっています。冒頭で申し上げたように、「違い」を受け入れる寛大な精神を持って下さい。確かに簡単なことではありませんが、

そういう心境になった暁には「違いとの遭遇を楽しむ」ことができるようになっているはずです。そして、これこそが異文化間コミュニケーションの醍醐味なのです。

4. 玄 関

玄関で靴をどうしたらいいのか、またスリッパを履くのかどうかなど、ゲストに教えてあげて下さい。玄関での決まりはアメリカとは違いますので。

例えば、日本では、外から家に帰ったとき、玄関の靴を見て、「お父さん、今日は早く帰って来たわね」とか「おや、見慣れない靴があるな。お客さんが来ているのか」などという「発見」をすることがありますが、ご存じのようにアメリカでは「玄関で靴を脱ぐあるいはスリッパに履き替える」習慣はありませんので、こういうことはありません。普通玄関に「共用の靴箱」といったものはなくて、自分の靴は自分の部屋のクロゼットの中におきます。

5. 居 間

ゲストに居間を案内してあげて下さい。ご家族の皆さんが各々自分専用の椅子を持っている場合は、その旨お伝え下さい。

6. 和 室

西洋人は畳、座布団、障子、襖といったものには全くなじみがありませんので、出来ましたら、実物を見せながら特徴を説明してあげて下さい。ゲストはきっと興味を持って耳を傾けるでしょう。スリッパを履くご家庭では、和室に入る前にスリッパをどうしたらいいのかも教えてあげて下さい。和室での座り方も見せてあげて下さい。但し、外人はあまり長くは座ってられないでしょう。特に、正座は「拷問の一種ではないか」と感じる人もいるかも知れません。

7. 寢 室

寝室について説明してあげて下さい。西洋式にベッドをお使いのご家庭なら、特に説明することもないでしょうが、そうでないご家庭では、押し入れから布団を取り出すところから布団を敷くところまで、実演しながら説明してあげて下さい。また、寝具のしまい方を教えるのもお忘れなく。ご自身で寝具の管理をなさる方がよいのでしたら、その旨ゲスト

トにお伝え下さい。(ただ、これはあまりお薦めできません。冒頭にも書きましたように、あなたは「メイド」ではないのですから。そして何より、結果として「自分で布団を敷いて寝る」という西洋人にとってはきわめて exciting な経験をする機会をゲストから奪うことにもなりますので。)

ベッドを使用する場合は、朝にちゃんとベッドメイキングするようにゲストに伝えてあります。ただ、寝室にストーブがある場合は、あなたのご自身で操作されるのが一番かと思えます。

ホームステイ期間中、ゲストが汚れた衣類を入れておけるものを貸して頂けたら有り難いと思います。段ボール箱で十分用が足りるでしょう。

8. お手洗い

ゲスト用のガイドブックでも一応説明してありますが、念のためにトイレの使い方も説明してあげて下さい。(特に、お宅のトイレが和式の場合は。) また、スリッパはどうするのか、どうやって水を流すのか、手はどこで洗うのか、なども教えてあげて下さい。

スイッチの沢山ある多機能トイレ (ウォシュレットなど) の場合は、「スイッチには手を触れないように」とガイドブックに記載してあります。

9. お風呂

ガイドブックに通りの説明が載ってはいますが、お宅のお風呂の使い方を説明して頂けるならそれに越したことはありません。湯槽につかるよりも、朝にシャワーを浴びる方が好きな外国人もいますので、お宅でそれが可能かどうか教えてあげて下さい。

一般に外国人は、日本式の熱めのお風呂には慣れていません。ですから、ゲストには一番風呂を使わせるよりも、ご家族の皆さんが入浴を済ませた後で、最後に (即ち、お湯が多少ぬるくなってから) 入浴させるのがよろしいかと思えます。

10. 洗濯

お宅に滞在している間に、たぶん「汚れた衣類を洗濯したいのですが」と言ってくると思えます。ご近所にコインランドリーがあれば、そこを利用させる手もありますが、お宅の洗濯機を使わせて頂ける場合には、操作方法を詳しく説明してあげて下さい。ゲストが

洗濯をする時に、そばについて指示をして頂いた方が間違いがないでしょう。どうしても「操作方法を英語で説明するのは面倒だから、私が洗ってあげる」とおっしゃるなら、それはやむを得ませんが、私共としましては出来たらそうしないで頂きたいのです。前にも申し上げましたように、あなたはメイドではないのですから。

アメリカではドライヤー（衣類乾燥機。大抵の場合、洗濯機の横または上にある）がかなり普及していますので、ひょっとしたら、お世話頂くゲストの目には、物干し台・物干し竿・洗濯バサミといった日本ではごく当たり前の物が新鮮に映るかも知れません。天気の良い日、ゲストと一緒に洗濯物を干してはいかがでしょう。「寝室」の項でも申し上げましたように、こういう「ちょっと exciting な経験」の積み重ねこそが、ホームステイの醍醐味なのですから。

11. 生活時間

ゲストの生活リズムがお宅の生活リズムとまるで違うということもあり得ます。「ウチの門限は××時よ」とか「ウチではみんな〇〇時には寝るのよ」といったようなことをゲストに教えてあげて下さい。ゲストに持たせたガイドブックには、ホームステイ先の家庭の生活習慣に出来るだけ合わせるように、と指示してあります。

12. 仏壇、神棚

ごく簡単にではありますが、ガイドブックに仏壇及び神棚の説明を載せておきました。ゲストが興味を示したら、お宅にあるものを見せてあげて下さい。ただ、ゲストと宗教論を戦わせる、といったようなことまではお薦めできません。なにぶん微妙な問題ですので。ゲストには、「決してホストファミリーをキリスト教に改宗させようとしてはならぬ」と言い聞かせてあります。

13. 食べ物、食事

異文化体験の中で、最大の難関は食べ物、ということもままあります。ゲストには、出された物は何でも食べてみるように言っていますが、なかなかそうはいかないこともあります。

「食べられないかも知れないな、と思う物は初めから出さない」を原則にして頂きたいのですが、困ったことに、この「予測」が結構難しいのです。殊に、ご家族の皆さんが美

美味しいと思っていられる食品の場合は尚更です。私共の過去の経験から申しますと納豆・ホヤ・佃煮・塩辛・刺身あたりが危ないかも知れません。そこで提案ですが、ゲストには是非食べてみて欲しい、という物がありましたら、最初はほんの少しだけ盛ってあげて下さい。ゲストが食べてみて「美味しい」と言ったらお代わりをあげるのです。こうすれば、貴重な食べ物が無駄になるのを防げるというものです。

ただ、上記の原則に過敏になるあまり、ゲストにはトースト・サンドイッチ・ハンバーガー・フライドチキンの類しか出さない、といったようなことはなさないで下さい。これでは、極端に言えば、日本に来た意味がありませんから。(逆にあなたが、アメリカ人家庭にホームステイしたと想像してみてください。あなたが日本人だからといって、食卓にご飯・味噌汁・漬物の類ばかり出されたらどうでしょう？ 確かに「無難」ではありましょいうが、アメリカに来たような気がしないのも事実でしょう。) 但し、普段から朝は家族全員パン食なんだ、というご家庭はこの限りではありません。

同じ外国人でも、箸を使える人と使えない人がいます。でも、諺に「郷に入っては郷に従え」と申します。ゲストには、まず箸を渡してその使い方を教えてあげて下さい。本人が「いくら練習しても箸が使えない。ギブアップ!」と言うまでは、フォーク・スプーンを貸してあげたくてもぐっところえて下さい。こういう「チャレンジ」こそホームステイの醍醐味なのですから。

ゲストに持たせてあるガイドブックの「食べ物の部」に、日本の代表的な食べ物のリストが載っています。ゲストに出す食べ物を説明する時にお役立て下さい。

西洋では、食事前に「いただきます」という習慣はありません。というより、そもそも英語には「いただきます」に相当する表現がないのです。(ついでに言えば、「ごちそうさまでした」もありません。) 強いて言えば、キリスト教徒等が行なう blessing と呼ばれる「食前(または食後)の祈り」があるくらいです。これは、声に出して祈ることも、(黙祷のように) 声には出さずに心の中で祈ることもあります。

食事中の会話について一言申し上げます。最近はどうでもないのかも知れませんが、少なくとも一昔前の日本では、食事中にしゃべるのは「行儀の悪いこと」と考えられていたようですが、アメリカでは全く逆です。アメリカ人は食事の時間を、「家族のコミュニケーションを取る機会の一つ」と位置付けているらしくて、食事中でも皆実によくしゃべります。私がアメリカ人家庭にホームステイしたときの経験から言いますと、昔の日本のように「行儀よく」黙々と食べていると、むしろ先方に「料理がおいしくないのかしら」とか

「具合でも悪いのかしら」などといった無用な心配をかけかねない雰囲気です。こういう事情ですので、食事中にゲストが話しかけてきたら、出来るだけ相手をしてあげてください。

14. コミュニケーション

今回お世話頂くゲストが知っている日本語といえば、せいぜい二言・三言（それも発音がかなり怪しげな）でしょう。一方、ホストファミリーの皆様の中には、英語が堪能な方もそうでない方もおられるでしょう。ただ、英語が堪能でない方も、いわゆる「言葉の壁」をあまり大事おおごとに考えないで頂きたいのです。

英語で話しみて下さい。勿論、（英語がペラペラという方以外は）簡単な英語で結構ですから。それでもしコミュニケーションがうまく行かなかつたら、別の手を試してみてください。「きっと私の発音が悪いから通じないんだわ」と思われたら、メモ用紙にその単語を書いてみるとか、辞書を開いてその単語を指差すとか、ジェスチャーを使ってみるとか、皆さんの創意工夫できっと道が開けるでしょう。（さぞかし楽しいゲームになることでしょう！）絵を描くという手もあります。時にはうまくいなくてイライラすることもあります。でも「チャレンジ」に失敗は付き物です。「うまく伝わればめっけもの」くらいの気楽な気持ちで臨んで頂ければきっとゲストと一緒に楽しい一時を過ごせることでしょう。

ただ、深刻なコミュニケーション・ギャップが生じた場合には、私たちスタッフにご連絡下さい。

15. 医 療

旅行中はとかく張り切り過ぎて、疲労から病気になりやすいものです。軽い風邪程度なら医者にかかる必要はないかも知れませんが、病気には早期発見が一番です。ゲストの具合が悪くなりましたら、速やかにスタッフにお知らせ下さい。私共で病院に連れて行って、適切な治療が受けられるように取り計らいます。（医学の専門用語の知識が必要とされるでしょうから、アシスタント学生の英語力では手に負えないと思います。）

16. 娯 楽

先に「ゲストのために特別なおもてなしは必要ありません」と書きましたが、それではどんなことをしてやればいいのか、とお悩みの方もいらっしゃるかと思います。そこで私

自身が歴代のホストファミリーの方々から伺った成功例を幾つかご紹介します。勿論下記のどれかをやってやらなければいけない、ということではなく、あくまで選択肢の一部とお考え下さい。

ごく手軽なところでは、カラオケなどいかがでしょうか？最近では、英語の辞書にまで karaoke（一部のアメリカ人は「キャリオキ」と発音します）という見出し語が載るくらいで、「カラオケ」という言葉は向こうでもポピュラーになってきましたが、実際の施設の普及となるとまだまだですので、一度もカラオケボックスで歌ったことがない人の方が圧倒的に多いはずですよ。最近では英語の歌も沢山入っていますし、ゲストもきっと楽しめるとおもいます。ゲストは英語の歌、お父さんは演歌、お嬢さんはポップス……という具合に皆さんで歌いまくれば大いに盛り上がることでしょ。

ボウリングもお勧めです。やり方は皆さん（勿論ゲストも）ご存じでしょうし、スコアも最近ではコンピュータが自動的に計算してくれますから、あとはストライクに拍手したり、ガーターにがっかりしたりするだけです。個人戦でスコアを競ってもいいでしょうし、（例えば）ゲストとお母さん、お父さんとお嬢さんがチームを組んで一投ずつ交互に投げる、という団体戦も面白いでしょう。やり方はどうあれ、ご家族の皆さんとゲストと一緒に汗を流す——きっと楽しい思い出になることですよ。

夕方、ちょっと時間があるときなどは、みんなでレンタルビデオを見るという手もあります。字幕スーパー版を借りて来れば、ゲストも皆さんも楽しめるでしょう。同じ映画を見て、一緒に笑ったり、泣いたり、はらはらしたり——それだけで十分楽しい一時を過ごせるでしょう。見終わった後で、（片言の英語と片言の日本語で結構ですから）映画の内容について話し合えたら、もう言うことなしです。

その他にも、近くのグラウンドでキャッチボールをする、などお金をほとんど（あるいは全く）かけなくても、工夫次第でいくらでもゲストを「もてなす」ことができると思います。私共がホストファミリーの皆さんに期待しているのは、まさにこういう「もてなし」なのです。

17. おわりに

（この項はゲストを見送って家に戻られてからお読み下さい。）

いかがですか、（大部分の方にとっては）初めてのホストファミリー役を見事に務め上げられた今のご感想は？ 「大変だった」「疲れた」とおっしゃる方も勿論いらっしゃる

でしょうが、それ以上に「ゲストが我が家に来る前は長いと思っていたが、いざ始まってみるとホームステイ期間はあっという間に過ぎてしまった」「ゲストがいなくなって寂しい」「楽しかった」「非常に有意義だった」「機会があったらまた是非ホストファミリーをやりたい」という声が多かったら、私どもにとってもこれ以上の喜びはありません。

このガイドブックはいくらかでもお役に立ちましたでしょうか？ 言葉の問題はいかがでしたか？ 本学からEMUへのStudy Tour（語学研修旅行）に参加してアメリカ人家庭にホームステイしたある学生がレポートの中でこんなことを書いていました。

（前略）ホームステイでは、自分から積極的に話す努力をしましたが、やはり勉強不足のせいか、言いたいことがすぐには口から出て来ないというもどかしさを何度も味わいました。しかし、人は言語を超えて心と心で通じ合う所もあるのだ、と実感できたのは大きな収穫でした。（後略）

皆さんも同じような感想（特に下線部）を持って頂けたとしたら望外の喜びです。お仕着せのバックツアーなどでは望むべくもない、ホームステイならではの大きな「発見」をされたことに大きな拍手を送ります。

最後に、皆様の御協力を改めて感謝いたします。有難うございました。